

ふるさとへの愛し方

金沢大学附属高校三年 東田 陽子

泉鏡花。

石川生まれの石川育ちである以上、もちろん今まで彼の名前を耳にしたことは何度もあった。金沢が誇る文豪の一人。泉鏡花文学賞。さらには泉鏡花記念館というのもある。

だが、彼をそれだけ有名たらしめている作品ということになると、読んだことがないのはもちろん、はっきり言ってなんという作品があるのかすら知識がないのだ。これはおそらく私に限ったことではないと思う。泉鏡花を「昔のすごい人」としてしか知らない以上、いわゆるお堅いイメージ、とっつきにくさを感じてしまうのが、私のような女子高生を含む若者たちの本音ではなからうか。

ともかく、代表作「高野聖」を読んできた。最初は、なんと読みにくいお話だろうと思った。文章の作り方が（当たり前のことなのだが）現代風ではない。まるで古典のテスト問題を読んでいる時のように、なじみのない言葉や言い回しが次々とでてくるのだ。だけど、不思議なことに、読んでいるうちに私はほとんど泉鏡花が作り出す世界に引き込まれていった。もう難解な言葉など気にならない。先が読みたい、結末を知りたい。私は相応な読書家だと自負しているけれど、こんなに人を引き込む作家には今までほとんど出会ったことがない。読み終えた後、いまだに泉鏡花をもてはやす金沢の地のことをちよつとでも「古くさい」と思っていた自分を反省した。彼の作品には、時代を超える確かな魅力がある。だからこそこんなにも愛されているのだ。その魅力を自分で感じた者として、私はそれを伝えたい、伝えていきたい、そして、金沢全体で伝えていってほしい。

とはいっても、いきなり作品を読んでもみましょう、というのではどうしようもないだろう。前述したようなとっつきにくさがある以上、なかなか手が出しにくい。だからこそ、彼の魅力を知ってもらおう機会を多く作っていくべきだと思う。実際、「高野聖」のオペラ化、「龍潭譚」の世界をデジタル絵画で表現、坂東玉三郎による朗読コンサートなどいろいろな企画が行われている。

ハードルを下げ、親しみやすくすることで、泉鏡花に触れる機会、触れる人が増えていくだろう。そうすれば、泉鏡花は、現代の作家たちと同様に、いや時にはそれ以上に面白い作品を描き出す人であるということが伝わっていく。どんなことがきっかけであっても魅力がわかる人にはわかるはずだから。実際

私も、この賞への応募がきっかけで生まれて初めて彼の作品を読んだのだ。

きっかけさえあれば、敬遠の気持ちなどどこかに吹き飛び、若い人にも泉鏡花のファンがきつと増えると思う。そして、金沢の人にとっては、泉鏡花に対する愛着はそのままふるさとへの愛につながる。先日の北國新聞の時鐘に「一番の地域振興策は、地元の人が地元のことを知ることだ」と述べられていた。人は知らないことに関しては、何の感情も抱けない。ふるさとに関することを知って、初めてふるさとを愛せるようになる。そういった知識からくる愛情が、あの震災からの復興にも役立ったという。

泉鏡花を知ったことでますますふるさとへの愛と誇りが深まったことを嬉しく思う。

(写真左は東田さんに授与された表彰状です。)

